三百箇條注解上

怡溪和尚著

壱

一 茶湯茶立事茶ハ急れて為主客色々當分なし事

此一ケ條ハ趣旨の序文の心茶ハ湯乃云ハ茶點乃儀式のごとく
立服主客の當分なかりし則淀足喫ハ服々以紀主遊之
茶點拾の事写書事書事天目風爐風爐裏爐ニて
臺天目臺子此外茶立振當分の儀ニ稽古ニ熟經
手前よし立振ハ口傳稽古の上ニして八飛成真行草
三服ニ而七服九服までも臺子茶立振是ハ秘傳の當りなく
常体の人ハ不知識ニ織法其人をもうといへハ此道ニ志深

肖と云ハ理あり其ハ趣体の心持如く写事を眼目とする事
風儀風姿衰ふとも茶之根如く居住居種々習ひあるも奥ハ
能く何迄の底意より道具之居と身の所作あひ之能
ろく客羽賀の為のよく左右の様を主として便の事なり
能く疲と孫之心をもおとし付茶之為肉一向雑念なく
心ハ緩々と静ハ在　私のおもひ沙汰無く推して肝要と云
あまり大事すぎ又ハ廉相ハ気をま先ハ抑ハ物ともことゝ
左門ともあらひのほしき事なと軽く延おもひ慢心又ハ縁る
身体あまりハその所々南ハ頭また種々の人其ハ出来あしく

匂猶々殺柢　と云ハ却而殺々のことなり常々よく心の
者稽古いたし並人前如くハ何心もなくしまりくと
張る事肝要のおもひ趣ある薄云能く不很なる事ハ
のそこ念々意を不動　生の心如く受用する所ハ彼初
のことより上智の境界如く中々中下の者難成丈の所
紹鴎利休居安主不古今数寄の宗道よりし人各気禄
修行理事不二の妙趣を窺観修数寄の玄旨ハ忘至
也云伝

三
一居住在ハ居安私の中分あるし事

居安ニ為事ハ風爐のことく茶立る时分ニ肩し左
の通ニ釜左の縁を以てさ水ニ罷リの様へ寄を行足ろ
くハ居り右の縁ニ身のつ様あひを定る故ニ罷リ右の
縁通ニ不出常の釜ニ罷のことく縁を水ニ罷りの様へ向ふく
まろく之置ことくハ前も左り右もあり安し居安ハ
身ニ紀此居位居ニのことく茶立る事多し此居位居も人
病者あるとハ不苦居る為客ニも人あると相待の时ハ不礼の
様ニも可有客の為卑亭主の年齢格位ニも寄
至し也此居位居能との事ニのことくハ亭主ともに居安は

紀常の居位居ニ而ハ難成故大目ニ為事ハ右の居位
居ニて亭主ニ付私の中ニ分有之と紀ニ至し

四
一万事術用ありて座るの成と云儀を分別せへしと紀
くあるを嫌は

総而道安乃ニ釜合ニ術用之営ハ術ことく手指の角菜
入ハ術のことく菜碗用香合を術ニ釜附ハ羽箒ハ用として
術用不動捨ニ釜合ることを留るり候へ術用不並用もあるへし
術用ニ釜合の心持ニ委細口伝有之 術用ととなりニ釜
合之事ハ嫌ふとさあしく 組十の内七ツ八ツまてハ術用

へ如く要かと云ふ思召てあるらし是ハ能き事也故也ふつつかなる茶といふ
まことしくと記せるは心ある真実に至るの事を云ふ如くハ全く無体
茶湯の仕様もあまり無理之点事七八分にまてハ自然
と十分に仕出来てあれば初より十分と云ふハ却てあしく作法
に拘りて言ハ不足の所もあると云ふ也 但此物ハ十分にしてもみちあるへし
に少すくハ私心ありし心うる故よしいきたるハ妙と記せり

一 茶湯ハ根具の根に以て仏智を得とも云ふなる如く八方と経
楽の事を本として身を修め治めとも教え経と云ハ経
従ひ楽と云ハ和融なり 数ハいつまでの老人まても
も数多く愛き如くハ下も上も同席にまでも一盞の茶にも

飲大小をも分ちて並び座して入ても和をもって段あり又た
いはゆるの位安ふして親疎明友の更かくても茶湯の道
を自然とこれのことお役徳事作法を正しくまもるは
経をもって段まて有る也 職に和して不蕩と云ふ心にも叶
たましたるやうに茶湯の道押廣くまては国家をも治めつへし
道理にもおのつから此所に如く 茶湯稽古の人ハ能く得
心すへきは常の身持の上にも万成事ハ倹約を守て尚不人
ことなかれ 茶湯の趣意の仏持を和かに要る為記と

五

一 路次ハ出来て獨立して様あつて

亭主迎ニ出る迄持出いつし入口の戸二寸斗明て置
客各同事ニ而て上客ハ手燭を取後先入て後ニ板ニ
持手水の客ニ而も前ニ有之通り囲の入口も入候而茶ニ出可申
末座の客より又亭主囲の入口へ持余數寄屋の時ハ取不
て　と志めし　も無し板ニ卓紙ニ置き能仕て囲へ持
行入亭主の取とき茶ニ居候座ハ中立のときハ
亭主手燭入さる故ニ炭茶のときハ右之通也然しても
座ましミても其の座ニ而亭主ハ中立のときに又手燭を
出し故後ニ座敷ニ入るときハ數寄屋のときの也

同茶ニても前ニ述候若上客手燭取候ハ末座の
者手燭を初より持来りも其客手燭を囲へ置なる時ハ
又其客ニも相改る時ハ後次の客より入る也代ニ而
數寄屋ニ而く末座源く余也右ハ大辞の節ニ而て早
竟主茶之時の振る人客次第ニ而て一通ニハ難云也

六

一 爐の来歴ハ同し振あるへと云ニ候ハ夫を利休二畳より
前し古織より上を遠しまつりたり
むかしハ常の居茶を囲茶と云故常用の為爐を
三畳ニ而利休時代よりかこひ數寄屋別ニ有之二畳台

不苦不狗の内秘庵の葉を掛る合次第大辞ハ二尺六寸ほと
竹物也又床の間ニ葉を掛る時ハ地敷居より打釘まで
二尺八寸或ハ五六寸あまりも右釘ハ床の間ニ打事もあり
是ハ掛物の枢子のかけてのこと也切者のよふハ右の分量を
紙の面とても常軒の人ゟ依る為紙ニ古法国の書ニ在
むしハ常の釘を打てよし用る

八
一 墨跡掛は竹くぎの事
天井の廻り縁より壱寸下ケ釘をうつ時ハ釘の出ハ八分九分
廻りぶちより九分下ケ打時ハ釘の出ハ壱寸ほとく廻りぶちの
寸ほと釘の出端と可掛てよし掛物のこと也竹釘くぎ廻り
古法の本ニ有は切目を下ニなして先をおこして打数寄座敷
ハ候の辞なく壁ニ直ニ掛る故折釘ハ揉なりとて弁
釘ニ波よろし
竹釘太さ三分厚さ壱分七八厘程
柄杓掛のくぎも同段目とよふなす

九
一 板床の事
式正の書院なとも板床なとハ曲数寄座敷なくハ俗の様なり
或ハ不入座ハ床板なし床の中程より奥の方へ打入紙香
爐を付香盆を置と座ハ格別昔ハ床具ゟ上の所ニ系
掛板なく客の数ニ随ふ座度を出して候人ハもなきよし

ありゆる様ようの上ミ違ひ数寄屋床の内向の方壁のめり
様ありも有るなり

十二 墨蹟の掛様清き床の此事

掛物の巻様 表装を解結目を左に
まつ座敷の勝手の方へ下を表へ
巻さる様ハ上より巻る又右の方へ
紐を引出し尽理ハ奥ニ結し或ハ絵
儀の墨跡ハ床の方へ引とく巻続数寄屋奥ニかく海
勝手の物数何時も勝手の方へ引広ゲ身と東山宗仙公

トコ	
床 巻	
此處ニ在りて巻のあたりに掛る	

口授を蒙る正意とす一何れも掛る時ハ下ゆくお
開き風帯との間ハ折目を能のばし幅にても中より手を
いさくしと幅様ニ当付て常の通掛三幅対ハ中を掛次ニ
左右と掛くりも時ハ掛物の右より左右と次第にたしを
巻畢ニ手少々風帯を掛物とも左右ニ直にいさ様ニ手
前左右とも左を下に能至し巻加減よく巻風帯の和ニても
相よく床風帯翻さる様ニ当相よし続の仕様三幅対ハ左
の通なるハ左ハ左ハ続きんをいふし中なるハ常の一幅物と
同前掛るなり 左とも下座の方より足を踏よくも踏むなし

立早りも其仏程して上客へ後ゟ成さる様よりへ合あるへ方わ
但床前の置きの前様かしも有るへき趣ニ掛物ハ置き香炉ハ口傳
一巻絵の事　右の方へ引ハ巻物かくしも何出ても出出の口乃
方ハ絵ありしる段ま取巻絵引遠のこと左絵の時ハ左口取
左へ引遠様ようのこと是出てハ三幅對五幅對の前様ハ
管有ともも是ハ三幅對五幅對の上ニ在仏作法あり

十三

一墨跡表具名所の事

表補絵ハ　一文字中趣縁と云
幢補絵ハ　一文字中上下と云

風帯　房 白ハ素 色ハ花　表紙所　巻緒
座金物　掛緒　軸頭　巻緒
軸色こう〳〵軸丸ミの下ニ節あるし真具なるたら軸先〳〵軸
赤地あ〳〵ひハ淺黄金物軸此軸ハ佛絵ニ用る
数多の墨跡絵讃詩歌ハ筆者の不ニよりて表具の仕様軸ニ
も有仏精ありしも委細ハ表具の書ニ記せ

十四

一表具大概三ニ乃表補絵幢補絵輪補絵の事

表補絵ハ上下を揃様へ似りし　幢補絵ハ中下を揃様へ早し
輪補絵ハ幢補絵の画中を細く趣様へ早きなり　此三

真行草なり

十五 一 床に墨跡と花入とあるときの事

書院に床あらは絵師に波して常体の囲ゆく墨跡花入並合せとハ先ハ掃除すり花生花入より中立以後花を入

掛ものへ床花と床花生ハ客の用意用の中立居しまは茶立る時ハかくかに殊に花も此の所の掛物をかけ床に

墨跡の花もし茶の時ハ初より墨跡の前に花を立へきと心ある掛物より生花初の夜分に夜自然ゆかりの掛物に立べし

外に無と茶湯ゆく法時絵師ふ次第先ハ三段の夜分の心得なり

十六 一 秋会に時ありて掛物をかける事もあり又無きこともあり

掛物の墨跡を掛る事ハ祖師の古則等の法語を床に掛置自然の仏法を観せるためなり 主来客に対し掛る故ゆへ無し捨ての掛物を並べ客来ることも一日掛物不掛事也

客来る時も有べし然く秋会ハ客来の体にて茶を立客をもてなすにも掛物ハかけても不苦を花を見ることにの心得なり此掛の外掛物をかけるハ異なる体も左に之し

又其会に床にも掛るに心得よし左ちヘ掛物をかけるにも細字

の事ハ悪敷候ゆへ面白からし絵も同前ニ秋冬を描の事なれハ

古人ノ通ゆくとても壹夜同し夜啼のところ秋冬かりりこう

くのとときハ不苦

十七 一 絵讃の墨跡ん掛様あり

絵を先ニ見て讃を後ニ見るゆへなし 但牧渓の絵讃ハ讃よ

り先へ見る事と言の由是記ある也是にハ取合ニ用ひ不申

十八 一 炉板裏表の事

方家ともに表の方が中なるめに肉ミあり裏ハ平之めん

表ハ廣し裏ハ狭し能く見るへしこれハ裏表かん面白き也

十九 一 流しめん口の炉板九枚目ハ見附より一枚合也

燕口ハ廣さ方に一寸箒目ハ厚さ方に一寸並ヘ京ニ而しめつきに在

見の時より旭斎並への格好ニ而炉板の長さハ寸法と

利休時代より狭く大きく成炉板之向端を振成並へより

選へく小振ニ勢ひさし並へ合せ合て細かくして手早

拙数奇ニ専精入れる事也

廿 一 炉板ニ付而不二事

墨の目ニ付而不極様ニしてのこし炉板ニ並合炉板の下

の墨入ことてつんめんかと嫡置の墨入目へ炉板二而掛る様

の仏持うし無処ハ床の真中ニ置れと是へかくべし

廿一 一花入の無据置入なるへし 又ヲしまをかと申事あるべし
床の付にあるとあつてその方へかたむけまむべきとあり

廿二 一雪中に花を入るゝ事あり紹鷗雪中の茶湯に総会(?)
雪月花の三ツハ古歌より荘観なる事ハ雪中に花を
入る事 織部よりも布花同じ事なく不立紹鷗花入なり
なき無味当世雖学花又の柱子如まよふるへし 又利休
雪中に紅梅二三輪咲たる一枝又入るへし殊に面白かるへし
名人の作まハ時ゆへり種々かるべし草ゆへく 一品にハ雖心得

廿三 一船の花入掛やう事
船の花入置者ハ床前の柱子ふきに置船ハ出船ゆへ入ハ入船に致し
花の入ゆへも檣ハの仏持に流たるへし 真中に入るへきとハ
泊り船と云ゆへきとても出船入船致候の時花ヲ生る事
所事なく花不立とく 利休此儀をさしゆき花ヲ
枝物りもさしゆへり出据に入へくべし 船の掛様ハむかしハ
床の真中 織部ハおしつけたるさハ左の方花入の汀

是ハ雪ゆへりのことはかりも壷にし庭前花ヲさかし咲る時
花にも是又仏持入ることなり

の通り花をさしかけの下紙ハ元付との皆好み次第よし掛ハ
座の付ニ寄る所の内ニ何連ニ而も亭主の心次第成の
深く出る船ハ船のこと六ケ敷ゆへ織部好ニ而深一節ニ
三段にせし伝

卅四 一 下ニ置ク籠の花入の事

水を入る所別ニありて露も不打様成事座ニ而も床板
置へき事ニ置三斎公ハ不打事もありしと申也時に
花ニも寄るへし 露打ハ床板ニ置へき様也

廿五 一 船の花入ニ水打事

船ハ水ニ縁ある上ハ一入露を能打へし 置所座ハあしく
床ニ細の板なりに置へし

廿六 一 花ニ寄打事

何連の花ニ而も枝葉並能あらハ花ニ寄打様ニ而
有之時ハ花不足の時ハ枝葉を切ていつれハさるへし

廿七 一 夜花を不入物語あり

紹鷗露路の景入に水仙を入られし数露路の雲丹ニ源
明く殊ニ色て絶儀の出来花の中を見世て一入つもりし風
説讃歌いよし 其後ハ夜会ニ花入る事中不入物の也

ゆへく自然と此文ハ秋気の花ハ新しと二事に有り々
重く悪敷ととく此由なく花新なと也　秋気ハ花不入掛ヒ
古来より替盛說ニハ利休緩斎宗温尼掛数寄者ハ
夜気の時花数一入風景あつて面白とて秋気ニ花を
入れとも替隣夜気に花入れとも白き花より茶をハ
燈火と同意ゆへく也

廿八
一床の内に名所之袖先帷裾軸先の事
床に向此方の左帷先右帷裾中帷先の手前掛にゆへく右
中軸裾左袖先右袖先

廿九
一床ニ燈火ヲ立ル事
於数寄ニハ行燈夜気ニハ多ん多ん一尋半ゆへくハ燈台掛
燈台右の内何とも一ゆへくも座敷横く床ニ左貝を置き
時ハ床ニゆへハ立床に左貝を置き座敷広き時ハ下に
立ぐし縦座敷広く一寸二寸ゆへく床ニ掛掛ゆるると
之座敷の付床の左右にとうく床ニ立てうし座
敷もあるなし一番ゆへハ猿弘又床に置あろ時ハ燈火へと
床へよろことなと見ゆと云一說も之早竟亭主の心によ
但床の真中に立る事ハゆへく左見ハ勝手次第なり

三十一
一 水指の置所ハ水指により又座敷によりても替るへし
四畳半大目一畳半風炉囲炉裏も水指の置所の
違ハ水指の大小座敷のつき所奥によりて広座敷ハ
小き水指飾とものの台子水指なとさしての規用何にてもなく不
置事を付置所よりの事なり左右へも置へし又
ハ先後へも少宛寄ることもあるへし

三十二
一 水指の蓋ハ置合せ不此外に大ひの物ハ横にあるへし
水指の蓋ハ向くる置もの置時もならさと横に置へく
候し 此頃の蓋何れも同事なり

一 水指とかり置合る時ハ餝りの様付に茶碗を立かね置
茶入ハ水指の通りなりとも時の様子によりて遠くても不苦
餝り法付のときハ水指の前を立かね置様に置合る時
様子によりて
水指かも立かね置ハ分備餝りのうちへ
出しても不苦水指によりて寄るへく大きなるとすこしは水指に立
かく違ハ格好無茶餝りの方も浪付の時ハ立かね難き
ものなることに水指前座から見合すこし何心もなく置
合茶碗をとり収むべしとかくしたものなり
一 水指茶巾茶碗附茶碗の上を袱紗

出の手も引き数は披術なく不覚悟第一重事は中にて
も猶なくも知るべき事なり
一 不附ざるの時は備へなり糸指の蓋の上に茶巾と茶箸と
外を指出ることもなし又は初より此の如く師に重ねてもなし

三十二

一 風箏の茶湯に糸指の前に在る具は風箏の絹にて在る具
一 下に重ね時口伝あるべし
風箏は術の元糸指は国の元此の二つに在る具は完なる重
事は是を専にて悪し自然に有るに重ね時は柄を抜きにて
も壁に掛重ぬべきを是を絹にて飾り成所なく水指

の前に茶は如何にも茶碗なくも下に重ね風箏の絹にて蓋に重
なくも還なくも下に重ね時は方同じ絹に重ね片方は縁
乃ち持ち出へ寄せ絹との口伝あり

三十三

一 大板小板口伝あるべし　大板九寸五分四方　小板八寸五分四方　但大小共に向の方へ少し出すべき
大風箏には小は小板小風箏には大は大板是は大小互いと云ふ也なくは
其の別にて在る程有趣る風箏は釜は術の元糸指の用の元にて
其の重ね絹有あるべし口伝なし事之大術は大板小板とも常
術の通り備への方是の座るなり九寸目十目其外にても
風箏に重ね合好みん合よし是の目数目と定めあるべき事

なくハちかし四寸まて長四寸も近ハ向の脇寸ハ大板小板ともに寸
より七分寸と大目ゆへハ二寸七八分四寸あまりゆるくなく風炉
乃大小次才釜の据付乃横竹の中程なかりしゆへ柱ゆるの旨
あまりともに手前ハ風炉の釜ゆゑも雖極大板小板とも
勝手の方四寸の目一つ又ハ小指の寄付の方四寸乃目一つ又ハ
小釜是ハ台子の間左右なくゆ組合乃合中へと据る也
なり

一 小板ニて風炉釜を中へすへとのへ置しはつかり余し据よ
但ハ入ハ置くゆ小釜寄付の方より続くすへ置る事

肝要敷寄者の目りゆゑへハ寄手のようかもても続くすへ据る式
外小板の事ハ五寸五分の分余ゆあるまじ

一 風炉の置様と云事ハ風炉を据て置くゆ小釜左
横手ゆゑくハ右の方を押入てゆるくゆ釜ハ左へ置様とて
あり据ゆるんゆる所之是ハ左右ハ横手の寸法平竟ゆるくゆ
ゆん据る為ゆゆるとの手ゆゑへ然と置様てへゆるとこ据る八
右ハ紹鴎寄子時ゆ甲斐町ゆ二二と云侘人四寸尾ゆく
みゆき寸ゆくゆして風炉を置紹鴎ゆゆん其の外寄長只
右ハ小板ゆ仕小板ゆ寸法ゆとし

夜会の時ハ座敷短檠を勝手ニ明て置てハ悪し座敷
の明りを見合おくへきにて主客座の後亭主出て挨
拶之例の通炭斗持出常の如く主も心得候勝手より手
燭を持出し炭斗の側に主置て居直りまへ行て釜
をとる後にとぐへし大目四畳半の時ハ囲炉裏の左の方へ主
半して置すし是ハ初より炭斗と炉縁との間へ寄ル主ハ
炭斗の内あかりとても見へてよし客の座敷見合るに
何もなくとも炭灰仕舞釜を掛炭斗を入後手燭を
勝手へ取る時客より手燭所望いたし床の掛物掛

見る時ハ待合燭返る時勝手へ入へし次ニ座敷何にこの
出ル時客へ挨拶いたし勝手口へ主据を出し後なりても客
座なりとも亭主の心得ニ手燭を持出し飾所へ主此燭台
の中置き主座敷へ燭を出し時ハいかなりとも飾るにん
をも飾燭台なし短檠燭台なりとも宜しく四畳半なりてハ
炭の内ニ手燭台の左の方ニ主客所ニハ客ニ同じ
茶のときハ水濡持出る後ニ手燭勝手より出し四畳半
大目なりとも初ハ手燭を持出し方囲炉裏縁より二寸
隔主茶を汲時四畳半なりハ茶巾あての内水指も

紹鴎の袋棚ハ木地黒ぶち桐の違棚と云

三十八 一 風炉まハり釜ニ茶入を載置茶碗大つき所なるへし

水指の茶碗　水指の左乃紹鴎ハ袖の違の丸釜之格子

の蓋付れたらハ風炉前かくし時ハ手付の方左より寺の前下

さ事へよきる風炉の目三目布と取る

三十九 一 道具ハ台子風炉の上板乃上ニ飾るの事

風炉先板の上ニハ釜を飾るとハ違棚ニても台子ニハ流儀違ふ

棚ニ而も台中ニ釜ニてハ茶入出る柄杓とつくる物なるへし

向へよるを飾るにやうニよるのことく風炉をれよの飾るとハ飾をなし

茶立る時茶入茶碗茶筅ニ而ても身の前ニ飾合ニ而も不能

据ル釜ニ手間ニお茶へ出る合ハ不苦候子なれハ其所へ及

か　身の前飾合あしく致る事のことなるへし

四十 一 ゑんつき乃釜ニ宗二宗及まつ宗易三人の事

宗二ハとぢめを先へ宗及ハ勝手の方へ宗易ハ茶へ釜二三人

ともニ其理ありとし

一 台子の袋飾茶釜面桶之所の引切柄杓を載持出る時ハ柄杓

のかうを面桶の縁へのせ持出へし　仕舞の時風炉具茶碗も

入る時面桶ニ柄杓掛置ときハかうを縁より先へ出し

掛盃是ハ水滴の湯を茶碗の内へ入ることを嫌故之柄杓
引切水滴ニ及ハ常の通又ハ其ときの湯ニ不足とき
水滴の湯を茶碗の内へ入るゝハ悪敷故茶へ入ると也茶の内へ
又振て出すにはし　是ハ席錺敬就て常用の水にて
のときハ初より柄杓の合を水滴の縁をこえし先へ出
高ふり柄振ハ左構ニ而ハ左右構ニ而ハ右

四十一　柄杓道具持ニ盃事

柄杓ハ道具持ニ盃事ハ名物或ハ唐物飾ニ杓ハ道具杯
用ハ柄杓の尻をとく由緒ありし物すしてハ不盃一向

新茶又香合ゆと盃ハ又格別なり　惣而ニ盃道具杯
用ニ持ゟ候遠柄水指柄ゆゟ茶入ニ盃事ハ不苦
是又茶入ニ持ニ可有之

四十二　茶入の蓋盃所の事

茶入の蓋盃所ハ茶碗の右乃仮置の通り柄
杓の柄と之の間ニ置風炉の時ハ小板ニ盃
是ハ悪敷ゟし露首乃茶入ハつる口ゟり付紐割蓋かね
此ときハ茶杓を北茶碗の上ニ盃左の方ニ出て出茶入を北
右の方ニ入下ニ盃其方ニ出し茶碗ニ盃て蓋とれ表

を含て下に置常の通茶をくミ入蓋をいたし出す時も初の
仕形のことし茶杓茶碗の上に置左の手にて茶入を取右
の手にて茶入をうつむけ其手に持なから蓋を取茶入と其手に蓋と
共に常の通仕舞も又茶杓ハ清め帰るを置て道具客へ
出して時ハ常に同し昔ハ茶入蓋拭ひある事の由置利休
より止

四十三 一 諸道具見せの目録あるへし
所作の道具用の道具と見るへき見せの目置様有あり茶入之
所作の道具見せの先の茶事を茶入の袋中に入て客方

同棚にて置茶碗ハ用の道具故客付の方見せの目一ツ置に
ならへたるとも棚にて置道具茶入茶碗とも見え座の
広狭ありて一図にハ難定置ハ数寄所作用の道具置棚所作
格あり茶筅ハ見せの目二ツに置とて置事不届にて置く
道具或ハ香合棚の類又ハ何にても飾初にも見せの目
根に置くし棚にて無之又置り所要客も切前ハ床棚の前
に置へき事を付たるもの故客前に置合ある事

四十四 一 置合せ組入と云事
右指の前通りと茶入茶碗の中ほと或ハ道具に[illegible]

一かやう人を召て手前を見せし茶立る時ハ弟子ハ次第よし

四十五 一茶入袋ヘ入る仕様

利休ハ茶入の前を前ヘ織紋ハ茶入の前と向ヘ茶入をふくらさ
拙様不足仕舞能よし　石州ハ茶入の前を前へいらしお右乃
方へ見し直出る時ハ左へかたし此結り前へなる様よ　人をも袋
たるを能及之入る時ハ蓋をも拭入さし指を右の内へ入る様よお
こくと袋之入れて後蓋を紐も手まく入るとさしも人をさし
指やく如くの上を押極る也将よし

一肩衝の類ハ袋をも口ハ脱小壷の類ハ袋をも手まく脱此二色

外に何の茶入も取り皆好次第袋より出様也将てあし
茶立る時前袋より出る前ハ風炉回炉裏も茶碗
の前文茶碗茶入をよう前様き時風炉の時ハ右回炉
裏の時ハ左へ前左右ハ勝手よりてかるへき趣也茶入袋
さきさきハ唐物和物とも大切の茶入ハ茶入に利敷物ふ
とくハ真其外ところ其の中斎細の夜理ハ口伝

四十六 一茶入の緒仕様口伝の其次第に右緒ハ口伝かるへし

茶入の緒結様上の結目高下のうさき様ハ打留の前袋に
包みさと付よう也如之ふの前文ハ其方おあく様に結て右

大釜の時ハ小さく小釜の時ハ大きく角一文字ニ為すべき掻よ
お丸ミなと流ち角の内（お中ミるニ周ニ掻ニ設し）口の角
同し掻ても角と角との間一文字の所も並の内
お宛る不有し自然の様ニ小さく灰の崩れしと和ニなん
掻るハうし然と押付掻くる事ハかさと悪し灰より
五徳の尻との間さ様らハ此次奥ニ紀し炭を並釜此
座との間昔より唐紙二枚程ニ云是ハ透間宜し掻
ナリとの数あらハ呂ニ四角数ニ四角円の方（丸ミなと付
方角の様備る掻ニとの香料角なとらくハ早意見大乃

保ち能掻ニとのことこそ其外同くハ見んるも能掻ニ上也や
又釣釜の爐中ハお先風ニさらくと設物のよし是ハ常
の通灰を去ニ其手迄ハ五徳無し故めらく於ては又ハ可なる
悪し勿論爐縁挽き故おあさめニ灰の入掻程恰好釜の上ニ
下ケルさく見合切着入る事なり

四十八 一 囲爐裏五徳置合の事

四畳半ニても大目ニさくも客尻お返一畳半ハ客尻向之客尻
の向の方五徳の爪爐縁（ニ付並据る客尻の向ニ掻昔ハ
種ニ口ハ先ニ炭に從多く座敷ニ之ても錦く あしさ

利休ある時湯治の時山の茶店にて手水を遣ふ見られ
通庵の大小おとこ子に赤まきを用ひ中大稲は胡椒丈よ
つまゑんく小稲は常の庵にも交ぜたるなり

五十一 一囲炉裏の柄杓釜の口より柄杓のかゝりあるへし
炉口は釜の足へ柄杓を掛け炉縁の角にかく事五六分炉口は柄杓
を左手柄の先にかくる事口伝なり前後に左手にも
炉口を見て釜の挌好程よくし一寸程は雑極釜は亭主
の代りにかく始終ゆる釜を掛置ても能
程よく柄杓を居置てしかし釜は炉口よりハ下にかゝる

あしハ分ちあるきハ悪しきと云

五十二 一 左ききの人の点前の事
羽箒くべ所左附に居て亭主先の方にかかりして居て何方にも
跡見炭のつまみ合せ置合附茶立の前も亭ハ羽箒前へくべ
置し又早下の右にて主客の方にくべくべし何の右も
あまくむさきハくべさる物なり主客ともくべ所よくと云事
左附にて居退物かしまく一膝二膝にて主客自然に居
羽箒ハ貴人より抜取の羽箒ならハ早下の右へ入る
小のかの羽箒ハ羽箒にかく囲炉裏掃除にくへる物の

也又初より香爐に空炉有し時ハささき摘くへさる摘有り
又後に自根にくへるを云事意亭主の方蒔に出し

五十三 一 多ささ摘一ツささの事

一炉のうさハ飛縄の稲出でより 近濤桜 公記御出来し
さる根より香し能揮りとめ香合にのる所とくハ三炉同炉を
炉に出ぬ香合の大小によりて好稲へいかにささき有り

五十四 一 四爐書之取出

後の炭並時底つくへハ入香合出でより亭主もまづ楷
並所よりハ客より度を取く振出して而不更後くも

よし客より亭主へ炭所望の事ハ無し但望まれ候とも
炭ハ亭主底をとらるる仕形をみん為との儀なきハ而不更ハ
きうとも而不苦自然初心の亭主なとハ亭主仕舞ゆへ客も
而不更不入事也底の灰撥ハ切炭の仕形をみん為事 行
要也とりくあふなくみえても炉と根を揃へとるとも之底を直し
時分を見合ささ炮ろくへお白合揃より客見て大目にみて底
直し時ハ底を直し炮ろく切炭の而炉縁へ寄せて直し炭を見て八
一炭の内に炮ろくに並流事 一炭の内にみて仕立事有也

五十五 一 小板の茶後の事

の灰定法なしといへとも此方ニ而ハ古ニ而ハ定し昔より
習来りし灰の格式なしさて前の前ニ而附ニ而縁至の上
次第いろ/\様ニ而も替りし定法なしと云事なり
一風炉の前は方五徳の前の脇の縁より風炉の際ニ而奥
の方へ灰を垂し遠入前の方五徳の肩一文字の前灰五徳の
爪の上より五徳の上迄して中風炉ハ壱寸壱分五徳の上
より灰の上迄にて弐三分程下ル右方五徳の足の内は方
灰の付様右ニ同様ニ而元の方五徳の前迄ニ而爪の
前ニ而入切様ニ而も末の方奥へ入る五徳の足ハ角の

前人の思ひ付の様よ之際能後五徳の足より前の方も元
の方ハ前角より灰を付初め末の方ハ内角より灰を付
初め右方ともに風炉も際へ同様ニ而し元ハ爪の前迄り今
五六分ほと奥へ遠入ニ而ハ末の方ハ壱寸壱弐分も遠
風炉際へ灰を付元の方ハ前の角ニ而灰の印迄肩
有し様ニ末の方ハ向の角ニ而灰の印迄肩ニ有し様
後もと申伝へもしてハ雑なる事ハ中風炉相替の心得ニて
大風炉小風炉恰好よりつり合次第の事ニ向の方下る爪
の後ニ而灰を一文字ニなさと云ふ右方前の前ハ

随ひ丸くかきよせ垂茶を五徳の際灰の仕様同前小風
炉なくハ五徳の外へ前を炭を引出し灰を付茶巾を
もある五徳なき風呂なくハ灰の仕様又同前茶を炭ぞ上茶
ハ五徳の外廻り一文字に後方の縁を何とも無之
様ハ自然と灰の為随もなく様子灰を掻めくらるて
右の五徳乃内際それの仕様ある事あり

五十八

一風炉乃五徳無様口傳あり
五徳の事ハ様ハ古き風呂の向乃表乃方へ客様乃内ハ有序
遠ふくしても小板より風呂ハ釜の中ほど続けて釜を

よく風炉よりの前後客様の所為続けくに成様に五徳を寺
極る事ハ行要釜の高下ハ風炉釜の恰好次第なくハ
なくとも雖極大かハ釜の底風炉の上通りより寺半
三分或ハ四五分もなく然様よし釜の腰いつさの前の下風
炉の上通りと同様なるハ姫かき不かろし更内ふくれ
あやうく下ケるす外ハ炭も垂かゝく向こうんとまを見まうさハ
悪しき為下様ろい風炉釜よりを高生の然よなし去故
昔ハ風炉釜の高さを大切に致し師匠の切者へつんと多
前よし左右おもさんとる設に前方へかたいめ成よし菊へうさ

炉のときハ客ゟ茶前ニ而炭を直し湯もよきさの様なる時も中
蓋置とも左あるましきる也　今ニ而さし候　世間ニ而稽古の為
不宜用

一　風炉のごとく茶立る時蓋置ニ茶入茶筅ニ而置し二方置と
娘敷蓋置をおさへてよろしく又ハ茶筅をおろし下ケ置てよし
茶筅おろし時ハ茶杓蓋置初ゟ下ケ合点よろしく茶杓ニ付
茶筅とおさへてよろしく常様の蓋ニ而も板のごとく茶立る時も
此心持のことし　風炉の茶湯の時湯をさし様ハめるへして
昔ゟ娘人会席の後茶菓子を出し炭を置ハ今ニ而もとも

多ふくときハて蓋置湯をさし置中置の内便掛ニ客へ文
しく肴を出しつ前ニ而ふく客を待入柄を揃子の手置し
肖要ゟ亭主の文数寄の手本ニ而ま　嗜お知る持る有之
心を付へし　委細口伝

六十三　一　茶入茶入ニ蓋置後ニ水指と蓋置ニ心持あるへし
茶入初座ニ而蓋置後ニ茶立る座へ蓋置も直し　一ハ動座有り
茶碗持出時茶入まて蓋置をハ二度ニ而有り娘衆茶碗置
会茶入不動座ニて初ゟ蓋置ニ而もの事有るへし

六十四　一　板ニ而炭具を蓋置左ニ而立るくハあしき也　中想別蓋置二度ニ

なすゝめ振ニ仏持あり
掛ニ茶入茶碗なと香合を並て置ヘ並し茶ニ手前と成
手指の茶わんくも並ハ振に成て初と仕舞の時と不遠
さる振にせくと壷合茶立ることも不義なり師を得へし
茶立る内茶入茶釜の壷処替るハ不苦早竟ニ壷合の
三度にすゝめ振にとのやうへなり

六十五 右勝手の時壷合小手

左勝手の時遠ク掛の羽箒香合壷置ハ袱に波と成也
羽箒用にするなら向く左の飾付の方に袱の座を
用ゆ壷右勝手ハ此通りニ三手ハ羽箒と飾付とく
香合と飾付の通りくるなと敷又羽箒を飾付の方ヘ壷
振ことのこと右ニ通飾付ヘ可とてと二壷附も同仏持羽箒
飾付の方袱の座に壷附ハ香合ハ用の座に壷袱用
壷振口伝

一 羽箒松にの座見ニ壷振左羽ハ左ヘ右羽ハ右ヘと昔より云
伝まこ見尻の壷操事し也仏国より口授なるまて（ハ手通よ）

一 羽箒香合に不限座見ハ何かくも掛に二つ三こ壷附袱
用の仏持右同断

六十六 一 くさり自在の釜さかさき釜ゟ上さかくても能くても
不苦ものそれ自在ゆるく成事
假自在ニ茶立る時ハあきをかけ自由ニ彼掛物常に掛
置ハ釜ゟ上さかくても能くも又釜能据て仕掛置
勿論釣釜先ハ少据なりと釜を下ケ火ニ付てさき据て彼置
先風炉井の灰の入据様ハ又釜なりし候ま茶立時釜
のさかりかけ時ハ後ニ不依事二重の事二ツ茶の下ゟ出
少付此所ゟ思案之

一 自在くさり風炉の時も用事也尤当世ハ希ニ成事之一畳

事大目の座敷なくも自然ハ自在くさりゟ出て釜を仕
掛る事もあり但中柱なくし座敷なく自在ハ悪しとなく
と付ハ稀なり罕事小座敷なとも仕掛るハ常所也

六十七 一 貴人への点下は点茶ニハ濃茶ニ出ても様を不仕事
貴人の点は茶ニなく点茶并時ハ濃茶ニ出ても濃茶様遊
感度も点礼申上るとの事也同事の事ニ至の事ニ出て
濃茶の時ハ戴迄なく絵ニ度く礼在し貴人への点ニ
茶ニなく濃茶の絵ニ出すまての時ハ又ハ常になくも濃茶
出ても一貼を無据へ足て事もあらずなく点仕舞ニ成据て

との事なり

六十八 一 茶入甚別あいしらひあつかひ

茄子文琳肩衝丸壺を小壺と云形が宛の習ある儀

知る事肝要なり 此等古来盆に載来る之茶入の内

なるは茄子第一文琳是に次肩衝も格別の事と云也

口伝 肩衝は茄子の形丸壺は文琳の形何れも真なる也

賞翫は茄子は指二つかけく持二つは底へあてく指を差て

持余の三つは指二つかけく持二つは底ゟ胴並く持其の

茶入大かるしめ形持自編仮初なし右のしりにて扱真なる

盆立の所にて覚る也茶入扱ふ事甚秘と云口伝

一 茄子は其形の似たる故名付文琳は林檎のことく形丸き故

名付文林郎の故事世に人の知る所也は不及記

肩衝は古来唐茶入丸真の盆子の時も長

盆子の外を盆天目と云茶入袋の緒は盆の時は長緒余の時は

常の緒なくしも長緒なくしも肩衝はかけと云て持也

指の先を底にあてく大指一つを肩へあてる長盆の時は

自編其外唐物あいしらひの時は右のしりなくく左に持

へ乃を丸盆時も右のしりにて丸盆持格別なり有し盆無し

常の茶碗のときハ左の方ニ置て小壺の拍据の通りに置
茶入ならぬ時右は名物ニ添くも参りて置ても小壺の拍
据の通りに下に置内海ハ小壺仕添さる挽溜よしハ唐茶
入なく猶手の椰柄なく数寄屋囲へハ出さる物の世間
置て云者いをとも左なくハ守し古来より数寄屋囲へも
茶湯ニ出ても其外口傳有之然も在流の覚別て記し大振成
大海小振成ハ内海と云と云事竟大内海小内海と云て候
こさうし又大國不儀のこうし

一肩衝是ハ元来唐茶入なり中興ハ和物の外寄觀致し出

旅ても名の旅なくも置ものを来る方肩衝文林ハ
角置ゟし無置ても拍据ハ指云なく指一ハ座へ面
此類の茶入拍据大ならぬ此通此外露肩樹楢の類置に飛
来る趣る大壺の類置て飛るとも昔ハ無し当世ハ茶入
みゟり置ての云是ハ皆小壺の置を借て飛る左理
のゟし唐物ニも尾張云古瀬戸の類茶入の性好にゟり番
人池色の名る事是ハ置て飛る客ニゟりと茶入ニゟりむ
さと置是ハ不致事の由なり

六十九 一 壺さ法ゟり中次拍据の事

少盃並テ湯を出し　疵と緒の上ニすまし右の人ニ出て
茶巾をとり天目の中より掛初肉の上ゟも下さぬやうにも拭き
亭ニ茶巾と先の盃ニ並天目を前ニより下く臺の上へ直し
茶入茶杓をとり茶を汲入茶杓ハ天目の肉ニ並べ茶入を置
少並して後茶杓ニ近く疵とかさまりと置くし肉の方に
蓋ニ入茶杓の茶を落振りて打茶杓をも拭き置へ戴く
通又湯を汲茶筌をとり臺の上ニ置て右の人ニ差渡す
茶屋者の通中ニ出て引渡し持への方ニ廻の先ニ並ニ置
次ニ後ニ座の方へ緒を完し臺天目を見をとるすまし

さらん押ニ直く臺を置て振て嗜又緒をすまし又亭ニて
客の前へ出て是を濯と云上客臺をとり能振りて出す臺
天目を亭主ニ渡振り嗜ニ其前へ直し次へ取して天目
臺ともニ前ニより直く向きも下通り押と臥を下ニ而載さ茶の
色をもつて云ふ度ハ格別大方の人さすくハ臺を下ニ並天目
斗ニ直く左の通飲ミ天目を臺ニ載次への者ニ渡す次の
者次第ニ飲仕舞上座へ返しとこ客茶の事を利次へ渡
ミの又ハ亭主ニ至へ挨拶致さん座天目並亭ニ仕廻もの
俄ニ座ニ茶ミ後座と押せん出度と云て臺と天目別ニり

亭主の出られ候に不遠縁にて返し亭主天目を臺の上へ載
時まづ茶の飲やうさてまたく其後かん合又天目臺を
あげてかん飯にハ左の膝を置につき右の手にて天目か持
上る事かんなる臺も同前天目出し候亭主ハ天目を臺より
おろし別々に出し客より返し候時ハ天目を臺へのせて返し候
仕舞にハ茶巾茶筅入茶杓のせ時ハ飯貝など乞又水指の蓋
を取て置時乞てもらし飛角亭主の仕舞よくこれらと
而茶入出し紙包正の和に紀伊茶筅盃二重し時右の仕方
あくれハ天目返しに返し亭主　されハ茶筅茶巾乃左捌も捨

主無茶器二重茶飲仕舞時思量なうし亭主は天目臺
たとへ相客なしの仕也亭主へ挨拶亭主かん返し時ハ亭主仕舞の
持ち様飯貝を包み茶あげてもらふ　持事に手前ならうしゆ
茶筅盃出る時ハ茶後かんなるに而茶盃出時ハ天目臺出し客
かんなる内に茶筅二重にて茶筅茶巾捌　常の通仕舞　持ちの
方へ客重臺天目の後かを盆の左へ置時客茶入
飯貝客かんなる内に柄杓水指天目も持ちへ入る柄かし時ハ
臺天目柄杓へ上二重私の飯貝持ちへ入る茶貝仕舞臺天目の
時ハ迄りし持ちへ入茶入盆柄杓上げ二重乞直貝行の臺子也

時ハ臺天目又ハ飾格別の習あり

一 初天目ハ貴人時茶入主ハ真行の臺天目ハ時と違ひ常の通り
湯をかたを汲入肉を洗ふ所しまひ湯斗入濯又水斗入茶
筅を又臺の左孔拭入て又盆の拂ふ力方拭入其後ハ
天目を下し臺を始ミて下ニ置又天目と共ニ取出して左
の手出て執る茶筅をとりさい茶筌ハ右の方ニ置かへと
出り座を客をば茶巾かくし肉あるをとりてさし臺と天目
を客へ出し後ニ返る時ハ重ねて茶巾茶筌と又右の通
仕舞ハ天目ハ少し左ニ取る時ハ左の手を添ふるの事

ありや　いの臺天目の時ハ湯と水汲交ちとハ無し茶具
仕舞臺天目の時ハ茶の仕服ハも湯斗出てもまさき湯
とかたを汲まさてもよし大かた通の拭子之外ハお客ある仕
服ゟし天目の臺級の臺もなく名物ある拭の臺ハ不及
云唐物和物新古又ハ傳来よろしく唯臺ハ紅葉の台縁
かくし臺の事ハ香細ハ二通目字一の事ハ紙の
臺の天目備ふる時ハ茶杓臺ゟ盆天目の臺備ふる時ハ茶杓
天目ハ盆ハ左右二段之通の盆也の下ニ茶入茶筅の唯次ハ下
香細ハ紙ゟし前後の茶ハ紅台能合ヨハ稽古の後能覚や

盆茶入かさり茶之事

盆点ハ四畳半大目畳半臺子風炉囲炉裏茶之稽古を
習かりし先ん四畳半ニ而盆点の時茶入を如此茶碗の内に指を
ニ茶入盆ニかさり茶碗ニ茶筅初より置居る又ハ持出の盆付ニ
備へ置事ニ而しのよふニ柄杓を盆ニ持出りうり柄杓を置て居
住居し先ん蓋置ニ置き柄杓を常の通置し盆茶碗ハそのまま
備へ其の前ニ置て此茶碗を常の通ニ茶入置次後ニ
ても茶入盆ニ載る侭ニ而盆をかへ茶入を引出し置て右ニ
ニ而く茶入を取茶入置し袋の紐を解きまへにに置盆を

ぬくなとして少し下ニ置なりとも茶入を袋より出し左の通
茶入を下ニ置袋を仕舞右の手ニ而帛紗を持ちつくるて
ふく茶入をとる左の手ニ而持ち左の通帛紗ニ而右
の手ニ而ふく盆のふちを置て又先ん左の手ニ而ふく茶入をとる左
の手ニ茶入を持盆ニ置右の手ニ而帛紗をたたみ茶杓
常の通帛紗ニ而ふく掛盆のふちニ置茶碗ハ右の方ニ置茶
巾ハ指のふちニ置常の通湯を汲先ん滌又湯を入中蓋を
志め茶筅常の通置し左の方ニ置湯をこぼし茶巾を
取例の通掛茶巾さはさし指のふちニ置右の手ニ而茶入

柄を茶入出し置茶を汲後掛る時ハ盆の縁にも丸方角
にも遠に貝の盆につかさる様に成とも盆の内ハ置
角ハかり丸ハ初より扱ひ也共置合入出し時ハ常の通り自然ハ
茶杓左の上手に柄より右の手にて盆の上に置ても
よし是ハ盆の縁に向て柄を右にし置の中庭ハいく
丸盆にハ横にも置茶杓掛時ハ初の下に置て
能し初より扱ふをもてもよし茶杓を置所ハ真之置も
置ハ茶之趣向小壺にかく茶碗置時ハ柄をひくくひくくとも
置てよくふたをすくせハ後にまくひかくさし柄取あり

一 茶筌ハ柄杓の柄の握る所の方節をおさへて節の下方に
置柄杓の柄と茶筌丸ハ柄杓を置時柄に少しつけて置も握りよし
下置茶を立る時ハ膝の前の方水指の先に置是ハ茶筌なり
茶も付たる茶筅故茶巾へつけてさる物にしておくへし又水際の後ハ
茶筅あくるまても初の通り右の方に置
一 風炉にて盆立の時ハ茶筌茶碗の前に置茶を立る時ハ
何れも右に同し
一 茶入不置の時ハ茶入盆をとり置て茶入を出し先盆を
置し次に茶入を出して盆に載てもよし又其まゝ茶入

呑し先茶入を出し次に盆を呑して後に出してもよし又
茶入盆並に出す時ハ並出して前に出し右二通の仕服出す時も
同様に書付右の方に並へ縁より四寸隔て同様書付物
是も常の様に見合能き程に可致也客貴人なとの
時分の事ハ亭主貴人の客より委細訳へし

一 盆に茶入載せて出す時ハ茶入の表を客へ向けて客の方へ
出し時茶入の書付の方へなる様にして並て大方は茶入を
盆と別に出してもよし

一 茶入の仕服亭主の出して前にてそれを並茶入の前後蓋の

仕服能くつん極めて手にてつん寄に挟み扱の上取りて手に持を
是に付てこの事ハと是を不離振りに蓋を入指にて入て拝
てつん後に蓋を取て口清めもの振事などつんて蓋をして
次へ渡すてつん納めて元の亭主の出して前に並へる品物の茶入ハ
扇子などか抜き蓋を載せて口を能くつんて仕服品物を見て
すくに貴人の茶入なれハ前の盆に戻し大方の茶入ハ
蓋を取りて並へて茶入口能くつんて出し手に蓋取し盆のつん仕
服を亭主の盆を出す時仕服を元亭主出し手に不及也一礼
辞退致して元再三篇伺ひ仕候などとも致すへくよし自然出し手に取るへくも

臺子の台持あり

一 一尺もれく盆立の時ハ指重香炉ハ指と盆との大小あり
よう又お向へも寄掛へも寄盆ハ水指の前ゟ重香炉へさら
掛よう人台あり菓子重香炉ハ前より風炉の時と同事

一 風炉の盆立棚ゟ重香も掛置ても水指菓子盆の重台を
掛菓子立掛右を色能さることより右の所を能合点まり進ハ皆
同台持有り真ハ前ゟも紀臺子一通ハ又各別の習あり
委細ハ口伝

一 趣ある臺天目盆菓子立掛る真の覚候事忽物を至事と注六ヶ敷

事ゟくく客前ハ雅成行真ゟても静かならぬ悪し仏菓子に
事も早過るも遅れ起菓子立掛り始終遅速なく能程合に
立る事肝要一切者の入状有り手前静かならぬ知さるしと
ある事台持之正敷唐物の袋ハ其外あれしられ形成事又
の袋ハ真にて覚えるきこの菓子ハさらにて仕舞納の掛様ハ
静之仕舞事習と云伝ヶ掛の取様之事とさ能く称名右
手業にてハ自然の極能く合点行くべし其ハ菓子立る人への先
繊年数格好相應の所もてのまし之龜角重伝の事なりとハ
雅成形る之真行草の臺子の習秘伝なり古物の事にて

和漢揃ニ據てハ大成揃あり依て古人ハ茶湯の古実也

七十二 一 臺子茶入の心くし宮へ掛る事

茶入香細組し

七十三 一 蓋置の置所の事

写しハ大目ニ而ハ風炉蓋置の置所ハ勝手の通り也

臺子ニ而ハ茶杓を蓋置に構て大成棚ハ右の方ニ置

台子の内右の方へ置又ハ大目の通り也置合ハ臺子

台組ニし大目ハ向ニ而も風炉并縁と畳の縁との間

同組ニ置事置蓋置を飾時ハ置合の如く

置様別に替りなし自分ニ而の茶ハ茶入不及云也釜和ニ而茶碗を取付

而も宮の蓋大小ニ付蓋置の取り合の能角湯の畳

縁ニ不掛様ニすへし

七十四 一 引切釜の蓋ニよるへし

大蓋ニハ小き引切小蓋ニハ大きなる引切扨又棚ニ蓋置も置

し所の蓋置ハ極の方を宮付へ組合也写しハ大目ニ而ハ

竹の極の方を向へ畳ニ風炉前の時ハ五徳へ何も宮付

より見る也又ハ極の方をあ向る事宮付へ段棚ニ置時の

事ニ而ハ置し勝手を引切もさぎを釜極の方を向へ

一 炭炉中の灰をいろハさる抔なり上火の炭衣斗に灰を
少々とらし又ハ雪天或ハ数寄の茶とハ上火に灰を掛ると好ハ
後の炭乃時ハ別る灰の仕様に灰の色も黒く炉中下火の
様子格別に見えらし灰をふるといふ事てハ悪し灰を蒔
なり風爐の時ハ深灰の色も六ケ敷習多し初者の能まれ
たる人習ふ事行要

一 後の炭必不可もあるし初の炭と同意に無し湯重てよし
当世ハ立炭と云習もありし立炭ハ誤のよし昔ハ囲にて夜に
薄茶にも立る故薄茶茶湯沸様に火を重中自然に
火箸なとつかふ後ハ此時なるへくらし

一 風炉なとく火を重ねし時ハ当て見ぬ抔なり炭を重仕舞釜に
水指附亭主猶く之入るゝ事なと善らり次第に当て風炉の
内つかふる亭主もさらんならハ出るへくらし 亭主居なりゝ水
指抔なふハ致不申つかふる釜とあるゝ火の移る時つかふるとも
あるも風炉ハ口なりつ又据なりつかふることなと不仕附之勿論
風爐の時立炭なし
炭斗抔乃貞数故初に飾見合立炭仕舞と不初抔なら
灰なくろくハ宜る座なし総ての故備ふなさき不何事なり

膳茶なと点る時自然ハ汚レて是ハ茶巾を改て仕打出し侍
まさハ初と様子替るへし

一 茶巾置ハ長さ七寸利休ハ茶巾の布かろく是ハ布一幅
中分ニ打置の目壱寸ホハ弐目ほと縫の仕様本縫ニして
両方へ折廻して折込置の隅を出張さる様ニ縫立来りし是布
を用来る縫ハ表へ出るくも不苦とてへ縫て以前の時布を切縫
なく端縫を仕様も在也

一 台天目の時ハ茶巾四ツ折置仕舞茶巾掛ニし茶筌も取出し
時ハ茶筌壺ニして置時常の通り茶巾掛もとも

又ハ通ハ台子の本ニ有る格別の仕方お定りの時ハ
茶巾布もし本分ニ切て置ハ続さ極也

一 茶巾茶碗ニ仕舞様常の通り茶巾の扱なるへし
茶碗の縁ニよりお前へ打出ても茶筌縦へて様子見合
次第ニお茶筌の湯とも茶巾ニ不付柄の本茶碗ニ不付
茶巾の左ニ置くてニ入る様ニ重ねての置るハ左へ侍
なとてハ點献の茶碗ハ茶筌仕舞様茶巾覚別なり
三日も目ニ記し

一 後茶巾仕様出侍なとてハ點献流儀ニなすへし種々有之

取時のことさハ手指の上に好くなる茶巾茶筌なと置ても
あるよ此外に色〻習あるへし

八十六一 茶巾之事

茶巾ハ布幅一寸五分二ツ折にして手次に添持出合へく
水次表向出時茶巾を添手を見て数奇屋の雑巾茶巾揃縫の
仕様ハ何方にも流儀有り

八十七一 茶筌乃あらまし扱ひの事

茶筌の持様節より上へ指の出るを嫌ふ濃茶の時ハ中にして
湯を汲時指をあて薄茶の時ハ振廻へ湯を入る時ハ肱をさけ払

[illegible]茶筌と[illegible]に成指肱より湯を茶を振る時ハ茶筌を
手の形のみ指を真直にして振る見事なり静かにせよ
振る悪し肩より振る也茶碗の内にも濃薄の時ハ横へ傾
茶碗の茶を立る時と不似指先の上之茶碗の内にて湯
通る振して立るハよし茶筌めくりて立るハ悪し初湯に入
たてる時穂先和らかにして茶碗の内にて二ツ三ツ打
返し振廻へ湯を茶筌を振ハ悪し仕舞時ハ茶を湯の中へ
さらりと置て茶筌穂先より湯振して茶碗の内にて二ツ三
ツ指先にてよし押ハ悪し茶筌立置処ハ風炉囲炉裏表畳

の時ハ茶入なとも天目なともあふのきを盆にのせさる時ハ板のうへにおく
台次第也

一 薄茶仕舞時板なをしハ茶入茶杓板に置合るとも又ハ盆に据
御用の心指弟子に此外茶入なとの茶杓の置所下の宛の習
節の下つきる茶杓ハ露蕾と云今の茶杓ハ其中次也と
申ハ茶合悪し節の中程にあるし茶杓よし茶入の節り
悪し茶合てあるし茶杓の削様名所ある昔より有之一の
伝授拘なく常の者に知事多し長茶杓ハ常の定也
なもよし象牙の茶杓ハ茶天目なとハよし常ハ不宜し

八十九 一 座敷を居かゆる事
座敷なとの居替りてもよし手前なくても座敷あり
定り居かゆると云法ハなし亀甲上客次第大方ハ会席の
時ハ給仕もかゆる也亭主の茶の時ハ亭主茶を出し為
手前座に座を外て後に居かゆる也座敷の付なりよく
有り

九十 一 貴人へ濃茶出す時の事
前事得式ハ替るまじく道具なと常の中にも念を入て
扨貴人へ茶を中出し候続かし茶碗なとも返しの時も会釈

此等の數まては和漢の寛由ともの事なり右條ハ茶湯絶
此外古来より名ある茶人の品相阿弥君臺観左右の記了
有之故略之

水滴　湯桶 此湯の數ハ袋に入る時緒の打留の方と先師並袋より出し時ハ口付へと客の方へ出し　釣付 釣肩より付或ハ片方斗

又付るもあり　弦壺 釣口より付此數ハ袋に入る時ハ釣の性好み方釣を壁に掛横ニ中ニ入袋より出し時ハ早く釣を横に致き茶道菓子かけし

鶴首　挽　糸底　常陸帯　棋子　老茄　藴緒

橘　筒高　橘座　鶴子　耳付　手瓶　飯洞

勢子　角水　瓢草　文茄 名物にて古今有之　車軸　風蘆

大霍　小霍　尻膨　付藻　廣口　擧座　鮟鱇

花瓶口

右の外古来種々茶人多出ニ不依花瓶口細くても茶杓乃
通ひあらハ勿論茶人少用茶杓の通ひ不成も茶人の出来ニ見
あまたハ昔も茶人少用る也利休茶杓通ひ不成茶へ出合
時底を打通して出宝家々の秀ケり
甚衣ら通しても根つる耕ハかさめる袖もなる存りは
此類数名を付名物の中利休後細ニ云不移を後宝家卿
自筆の此等出お名孫名物も成り中をえ傳係茶杓の座也
其しハ大形の出来よりてハ茶人少用る事ハ形成

一 茶入の茶すくひ出すハけくむと云 茶杓にて少つゝすくひ出し
と云事古来有之也
大壺 小壺 九重 面取 濃茶 薄茶 肩衝の時ハ 此数を用 中次大小ハ濃茶も 壺こと数
の時ハ薄茶 用之 茶桶 茶籠 吹雪 頭切

九十八
一 茶湯を立るハよしさはしからハ無益事
湯るハ久損を理る事也 常体の事也ても十分ハ嫌湯茶湯ハ
根元隠者のすさひなる体を学ひなるによる事也ハ少侘の者人
隔者也ても立る体ある勿論さはしからハ至極也の
すさひなるとさはしからとの躰中に在るを知る事也と頼ても
今の乱乃事に去国の在理ハ口傳
世間大方の人の名物ある足を自限相違の上事也らぬ躰もと
八分程能取に不足なるへしを自限不知在之ハ然とさひ
なる体に相見るなハさはしかるとを云 紹鷗ハ手宗易ハ利休の
孫当事を見侘人如く路地の掃除形はか少村家あるし 時に
御笠面村 掘立茶湯度と也是ハ正侘の体さひそめ
よし宗旦を学人は紹鷗も人も見ても能と紹鷗不掃除有
後言事ハ無益とさくしからを可云又ハ侘人の国に住居に
度体さひしく面白き人ハ隔者の国能とこと住居去去し心得ん

若輩く思し者又ハしかと不云して覚悟ある事
ある迄者ハ常祈の道理に似たる事にて全く古人の分て
不仕様に此段可被致座敷て茶湯向之の為体者ハ茶湯
趣様に拝領可之入るゝよし出て肝要の心得なり

九十七一 座敷の上座ハ上客次第の事

数寄屋図ハ書院に替り候の　内にて上座下座の定り
有之し床の上座にても下座にても付来る上客の座となる
上座と心得てよし　上客の方ハ不及云縦因ニ其内にても茶
湯の時ハ後年上客接待に任せ主来座より指出す事

など随主上客不案内の亭主ハ末座より挨拶にても可有之
外ニ者ハ自然の義猶客ハ何時も床より向く居る様のよし
又云床の前に書又ハ下座前に先居亭主出て請る
時ハ上座へ上りてもよし　亦尚座上座敷の様子次第ニ挨拶
ともに亭主へ挨拶給仕の儀ニも随ひて亦可入合居るなり
肝要なり

九十八一 朝の茶湯に必ず水を遣る事あり

昔ハ何客も必茶の客出ハ早朝ニ次第去る水田へ請し入
客の遅速によらず亭主自ら出て客を対話ヲ云

若發く延し是又さはしかると云るとて無益なる事
尤も是ハ常体の道理ニ依る事にて全く古人の云
不叶能く此段可致斟酌事茶湯向の意味是ハ茶湯
趣辞ニ拝得可有之ニよりて肝要の心持也

九十七 座敷の上座ハ上客次第の事

数寄屋囲ハ書院ニ替り候の　ニて上座下座の定り
無し床も上座ニても下座ニても付合所上客の座なる
上座と心得てよし　上客の方ハ不及云縦ひ末席ニても茶
湯の時ハ後第一上客様相ニ付を立末座より指出事
さと極め上客不案内の仕方ならハ末座より残らずも一方なし
於是ハ自然の義　猶客ハ何時も床の前ニ居る物のよし
正客床の付ニ着又ハ下座前ニ先居亭主出て挨拶
時ハ上座へ上りてもよし　兎角ニ座敷の様子次第茶後
とも亭主へ挨拶給仕の儀ニても能々示す見合居るなり
肝要なり

九十八 後の茶湯ニ必水を替る事あるべし

昔ハ亦会無し惣の客ニ而ハ来掛り次第茶ニ囲へ請し入
客の遅速なくし来るを亭主出て客と対話会

事も世上ニ而ハ右の通なれとも此流茶巾数二ツニ而
又帛紗なとある所何なくとも合数四ツなる也
其ニハ水指茶入斗ニ而二ツなりとしも云也
なくとも上るまても同し客座ニなりとも座ハ茶巾
三ツハ始終客ニ付ニ付るとも一ツハ客の為也
打合ハ三ツ始終客なくハ後ハ客なりとしも其座
理ハ座ニ三ツ茶巾二ツ也ハ其の時ハ茶客ニ而
陽数なれハ打合する時ハ客なく陰数なれハ陽
中の陰ニ而不審座の三ツ二ツ客の時ハ
也右陰数なく打合する時も又客なくて陰数なれハ
陽ニして帛紗を茶碗此ハ二ツ人ハ活所ニして自由之
座ニなく三茶也又ハ座の三客ニ而三茶ニ候
ハ常柄の理也角帝偶の秘能る置し帛紗同
之ニ而よし又陰陽不離相にて相肝要なり縦初り
て其帛紗とも右の秘入る事也説通相の三ツ乃
帛紗も同前
一 茶入茶碗別ニ置時ハ数二ツ茶碗ニ茶巾にてしも復紗
なくとも茶入を入るまてハ数二ツ也摘扱其置不